

① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

生物学にネオテニ理論というものがあります。「幼形成熟」と訳されます。子どもが「成長」して大人にならないで、子どものまま成熟するという意味です。

そのとき何が起こるか。

進化が起こる、という考えです。①

たとえば、サルはどのようにして人間に進化したのか。サルのなかで優秀な(たとえば脳が大きいとか直立二足歩行が得意とか)大人のサルが、人間の起源になったのでしょうか。そうではありません。ネオテニ理論では、こう考えます。②

たとえばサルの大人と子どもを比べてみます。当然、大人の方が賢いですから、より人間に近い、と考えます。ところが、子どものサルの方が人間に似ているのです。③

ゴリラの場合はどうでしょう。大人のゴリラはごつい顔をしています。ところがゴリラの子どもの顔を見ると、顔と頭部のバランス、横顔で見た鼻や口の凹凸、それらが人間に似ているのです。顔だけではありません。全身のシルエットも、大人のゴリラは、腕が太く肩が大きく、両手を地面について歩きますが、子どもの体は、人間に近いのです。④

たしかにサルの子どもの人間に進化したと言われると、そんな気もしてきます。⑤

では未来の人間はどうなるか。人間が、超人間へと進化したとき、それはいったいどのような姿をしているのか。このネオテニ理論そのままに考えると、子どものようなルックスの大人、それが未来人ということになります。(中略)

とつの世界でちよつとした成功を収めると、その「看板」で生きていくと安易に逃げがちです。しかしピカソは、画家仲間「気が狂った」と陰口をたたかれながらも変貌を続けました。この展覧会を見ると、その変貌が実感できます。

A ピカソの作風の変遷を見るだけなら「子どもの絵」である必要はありません。

この上野の美術館に足を運び、最初の展示室から順番に、ピカソが描いた子どもの絵を見ると、たしかにこの展覧会は「子どもの絵」でなく、とはいけなかったのだ、という理由が分かってきます。

はじめの部屋でピカソの絵を見ていて思うのは「③子どものかわいらしさを捉えているな」というような感想です。ぼくも家で、息子を見て、毎日顔を合わせている息子ですが、ときおり「子どもはどうしてこんなに小さいのだろう」と新鮮に思うことがあります。ちゃんと人間の格好をしているくせに、オモチャのように小さい。それが動いている。息子とはいえ、不思議な存在です。ピカソの絵にも、そんな子どもの姿が描かれています。

しかし描かれた時代の順をおって展示されている絵を見ていきますと、そこに描かれているのは、そんな「子どもの外形」ではなく、子どもそのものになっていくのです。B 子どもを見て描くのではなく、画家の視線や描き方自体が子どもの世界と一体化していくのです。ピカソが生涯をかけて追求めたスタイルとは、子どものように描く、ということだったのではないのでしょうか。

若い頃、ピカソは前衛的な芸術運動に身を投じました。しかしそのような実験的スタイルで、時代を風靡できるのは、そう長くはありません。ほんとうに長い間、人を魅了しつづけるには、それなりのC な世界への到達がないといけません。そしてピカソが到達したのが「子どもの世界」

子どもに秘められた可能性・能力を見たとき、未来の進化した人間は「子どもみたい」というのは、あながち誤っていないのでは、とぼくも考えます。とくに芸術の世界を見たとき、アートが向かっている方向は「子ども」であるように思えてしかたありません。

その典型が、二十世紀を代表する天才画家、パブロ・ピカソです。

二〇〇〇年の春に、東京・上野の国立西洋美術館で「ピカソ 子供の世界」という展覧会が開かれました。② ピカソが描いた子どもの絵ばかりを集めた展覧会です。

それらの絵には、子どものかわいさがあふれています。幼い息子にピエロの服を着せたり、口バに乗せたりした光景を描いています。赤ん坊のふっくり膨らんだ手や、オモチャを両手に抱えた娘や、親バカぶりの視線に溢れています。

しかしそれは、単に子どものかわいさ、だけを描いた絵ではないのです。じつはこのような子どもの絵ばかりを集めた展覧会こそ、ピカソの芸術の本質に触れたものではないか、と思えます。

ピカソは、生涯の初期から晩年まで、子どもの絵を描きつづけました。カメレオンと呼ばれたピカソですが、子どもの描き方も、それぞれの時代によつて異なっています。初期の写實的な時代、青の時代のメランコリック、キュビズムの絵、新古典主義の時代の造形感覚、また晩年の自由な線による絵。子どもという切り口で集めても、ピカソの芸術の変遷がみてとられます。ひとつのスタイルを確立すると、それを裏切るように新しいスタイルに挑戦する。そもそもピカソは、青の時代の作風を生産続けていても、ロートレックなどのような画家として美術の歴史に名を残したといわれます。しかしピカソは、一つのスタイルに安住しその道の大家になることを嫌い、つねに新しい自分にチャレンジし続けました。ぼくたちも、ひ

だったのです。

④ ピカソは、絵画の世界において、生涯を通じて「子ども」になるうとしました。だからピカソの絵は、子どものようなのです。大人になっても子どもでありつづける。それができる人を天才というのでしょうか。普通の子どもは、自分が子どもであることがどういふことか分からず、気がつく大人になつてしまします。だから子どもそのものよりも、子どものままの大人のほうが凄いのです。プロの芸術家とは、そういうものなのでしょう。たった一度、子どもになることはだれにでもできます。しかし「子ども」であり続けることは難しいのです。

ピカソは、⑤ それができた数少ない人間です。それは「進化」への一つのステップでもあります。

だからピカソが描く子供の世界は、単にかわいい子どもが描かれた絵画ではなく、人間が進化するとはどういうことか、それを垣間見せてくれるもののなのです。

「子ども」は昔から存在したわけではありません。ピカソが、それを発見したのです。

ピカソの最大の功績は「子どもの発見」なのです。ここまでの説明で、絵を描く才能を発揮するにはどうしたらいいか、お分かりいただけたかと思えます。

自分の中に「子どもの世界」を発見することです。子どもに絵を教える場合も同じです。子どもが本来持っている、子どもとしての力を引き出してやればいいのです。それは幼稚さを肯定するということではありません。

【布施英利『子どもに伝える美術解剖学』】

(内容を一部省略しました)

注1 青の時代のメランコリック

…ピカソが青い沈んだ色調で描いていた時代のこと。

注2 キュビズム

…二十世紀初めにピカソらが進めた絵画運動。立体派。

注3 前衛…時代のさがけとなって活動すること。

注4 風靡…大多数の人々をある傾向にしたがわせること。

問い一 [A]・[B] に当てはまる言葉を、次のア～オからそれぞれ選びなさい。(同じ記号は二度使用しないこと。)

ア たとえば イ しかし ウ あるいは

エ なぜなら オ つまり

問い二 線①「生物学にネオテニ理論というのがあります」とありますが、「ネオテニ理論」では「進化」についてどのように考えていますか。三十字以内で説明しなさい。

問い三 次の一文は、本文のどの部分に補うのが最も適当ですか。本文中の①～⑤から選びなさい。

・サルの子どもが、大人のサルにならないで人間になった、というのです。

問い四 線②「ピカソが描いた子どもの絵ばかりを集めた展覧会」についての、筆者の考えとして当てはまらないものを、次のア～エから選びなさい。

ア 子どもへの愛情を込めて描き、子どもらしさが十分に表現されている。

イ 画家としての評価を得るために変化し続けたことが、よく理

問い五 本文の内容に当てはまるものを、次のア～エから選びなさい。

ア 子どもが生まれつき持っている幼さを受け入れることで、彼らが持っている絵画の才能を伸ばすことができる。

イ ピカソが見出した子どもの本質に触れることで、わたしたちはそこに未来の人間のあり方を感じ取ることができる。

ウ 常に最先端の画風で子どもの姿を描き続けることで、ピカソの絵画は多くの人々に受け入れられるようになった。

エ 現在の芸術の世界は、子どもが本来持っている能力を様々なかたちで取り入れることで、進化を続けている。

解できる。

ウ 子どもを描いた多様な作風の絵を通じて、ピカソの芸術の本質が分かる。

エ 周囲の考えを気にすることなく、困難に挑戦し続けた生き方が感じられる。

問い五 線③「子どものかわいらしさ」とありますが、その説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 小ささや、そのことへの驚きからくる謎めいた様子。

イ 子どもそのものが持っている、根本的な魅力。

ウ 日々成長していくなかで、そのたびに見せる新たな姿。

エ 日常の動きに表れてくる、子ども独自の世界。

問い六 [C] に当てはまる言葉を、次のア～エから選びなさい。

ア 抽象的 イ 総合的

ウ 古典的 エ 普遍的

問い七 線④「ピカソは、『子ども』になろうとしました」について

(1) それはどういうことですか。本文中の言葉を用いて三十五字以内で説明しなさい。

(2) そのことで「ピカソ」の絵はとなると、筆者は考えましたか。それを説明した二十六字の部分を本文中からぬき出し、最初と最後の三字を答えなさい。

問い八 線⑤「それ」の内容を表す部分を、「こと」に続くように本文中から二十字以内でぬき出し、最初と最後の三字を答えなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

高校二年生の「わたし」は、幼なじみの男友達である那津とともに吹奏楽部に所属し、フルートのパートリーダーを任され、全国大会を目指している。合宿を目前に、同じフルートの下級生である花岡さんのことで悩んでいた。

合宿が終われば県大会が待っているのに。このままだとよく悩んでるだけじゃダメだ、やっぱりきちんと花岡さんと話をしよう。もう一度、自身に言い聞かせてからからだを起し、明日の準備に取りかかった。

しんとした館内に足を踏み入れる。高い天井のあるエントランスにはまだ誰の姿もなかった。

「クラいよな……」

ぼつりと洩らした那津の呟きにわたしは天井を見上げた。片面の壁全部が嵌め殺しになっている窓からも、はるか高い位置にある天窓からも、たくさんの陽が差し込んでいた。

「そうかな? 明るいじゃん」

「ぼけてんなよ」

何がおかしいのか、肩を揺らせくつと笑った那津は、黒い大きなスポーツバッグを隅に置くと、ズボンの後ろポケットからサイフを取り出した。「ジュース買いに行かね?」

言うなり歩き出す。宿泊施設になっている建物を出ると青い芝生の広場があり、石を積んでできた階段を上ればあとは練習室とホールのある白い巨大な建物があるだけだ。その後側は鬱蒼と木々の生い茂る山々が見え

るばかりで、本当に人里離れた場所に自分達はいるのだと思い知らされる。白い建物内に数台の自動販売機があるのだった。合宿の間、三度の食事以外の飲食物はそこでしか手に入らない。『マムシ注意』の看板に怯えながら那津の背中をわたしは追った。

「クラいだろ。くる途中もぼうっとしてさ。おばさんひとりで喋ってるのに、全然聞いてないし返事しないし。まいったよ、マジで」

クラい、というのが自分のことだとうやく気づいたわたしは、ごめんと素直に謝った。その声がまたウツウツとしていて我ながら嫌になる。

「いいけど。つつか、おばさん、俺のことなっちゃうって連呼するの、あれ、わざとだろ」

カンベンしてほしいよなあ、俺もう十七歳なんすけど、とふざけた口調で言いながら那津は両腕をぐうつと高く宙に伸ばした。② カッターシャツの肩口が透けて白く光って見える。

那津は自動販売機にお金を入れると、どれにする？ とこちらを見た。そつと人差し指を伸ばす。がたがたと、派手な音が広い建物の壁に反響した。

掌の缶はひんやりと冷たい。わたしはそれをそつと頬に当てた。那津は幾つか用意されている椅子には座らず、ガラス張りになった窓際へ立った。正方形の建物の真ん中をすっぽりくりぬいた中庭には、緑の芝生とモダンな造りの階段や銀色の人型をしたミニUMENTが見えるだけだ。

③ 那津は演奏してるときに、他のパートの音ってどれくらい聴いてる？」こちらの唐突な質問に、那津は少し考えてから、

「自分ではちゃんと聴いてるつもりでいるけど。俺らは打楽器だから、先生の指揮に意識向けてることのほうが実際は多いかな」

「じゃあ、同じパート内の音は？ ちゃんと聴いてる？ 誰かの音が抜け

ら、もうどう説得すればいいのかわからない。

「吹奏楽のいいところは、本番で誰かひとりが失敗したとしても、それと同じパート内でカバーできるところにある、って聞いたことはあるけど。管楽器はそれくらい音圧があるからだって」

だけど、と。那津はきっぱりとした口調で言った。

「そういうのは努力した結果、本番でそういうこともあるかもしれないって話だよな。最初から諦めるってことは全然違うと思うけど」

「うん……」

わたしは叱られた子供のようにしゅんと頭垂れた。

コンクールでの審査員の耳だけを意識した演奏に魅力など宿るわけがない。

あのとき。きちんと言葉にして返すことはできなかったけれど、^A 確固たる思いは胸の内に存在していた。わたしが目指していたのは、今自分が妥協しようとしているような、誤魔化そうとしているような、^B そんな音楽ではないはずだ。

「あのね」

那津の横に立ち太陽の陽射しの降り注ぐ中庭を見ながら話をした。土屋先輩に指摘されるまで、同じパート内で音を出していない人がいることに気づかなかったこと。指摘されて以降も、まずいとわかっていながらなら注意できずにいることを。

「女子ってメンドクサイって、那津、前に言っただけど。本当にそのとおりなんだよね。なんかね、注意できない。鬱陶しがられたり、嫌われたりしたらどうしようって、想像すると何にも言えなくなる。パート内や部内の雰囲気悪くしたくないって言うのもあるし。県大会近いから尚更」

わたしが言葉を継がなくなると、那津は、ふうんと小さく相槌を打った。

たらずぐにわかる？」

「そりゃ、わかるよ。打楽器だからひとつでも音が抜けたら目立ってしょうがないって」

「……そっか。そうだね」

わたしは掌の缶に視線を落としたまっすぐなすいた。

『祭り』ってね。フルートもピッコロも十六分音符とか三十二分音符とかたくさんつづいてて、指使いも タンギングも縦の線を合わせるのも、有り得ないくらい難しい曲なんだよね」

「知ってる」

「もちろんフルートだけが難しいと思ってるわけじゃないんだよ。パーカッションだって大変なのはちゃんとわかってるし」

「うん。——で？」

「でね。たとえば、なんだけど。たとえばフルートのなかのひとりが、どうしても縦の線を揃えることができなかったとするでしょ？ 何度練習してもうまくいなくて、それならいつそ自分はそこだけ吹かないほうがいいんじゃないかって判断したとして。その部分、たとえば一小節だけ吹いてなかったとしたら、——それってやつぱりまずいと思う？」

え？ と臍抜けた声を出し、那津は振り返った。⑤ わたしは掌の缶から顔を上げられない。

「それって、まずくないって答えてはしくて訊いてんの？」

わたしは泣きそうな顔を横に振った。もしそんなことをしたら、たとえば審査員は容易に見抜くだろうか。実はそんなことばかりをずっと考えていた。問題の解決にはつながらないとわかっているのに。ひよっとしたら、と思うのだ。ひよっとしたら花岡さんも同じような考えでいるのかもしれない。だからその部分を克服しようとしなのかもしれない。もしそうなら

やつぱり女子はメンドクサイキモノだと実感しているのかもしれない。

「だけど、あれだね。マジで耳がいいんだな」

ふいに語調を軽いものに変え、那津は言った。

「え？」

「土屋先輩だよ。よそのパートの音がほんのちよつと抜けたからって、フツは気づいたりしないだろ」

「あ、うん、そうだね」

実際、同じパートにいるわたしでさえ気づかなかったのだ。

「確かにそう思う」

自分の唇から出る同意の言葉がやけに^B 空々しく聞こえた。どうしてだろう。土屋副部長に指摘された当初はどうして今頃になってそんなことを言うのかと、もっと前に言ってくれば良かったのにと憤りはしたが、それでもその耳の良さを、今の那津同様わたしも感心したはずなのに。

那津は腕を組んだまずっと外を見ている。何だか胸がもやもやする。両胸の、ちようど真ん中あたりが気持ち悪い。みぞおちに手を当て拳を握る。何だろう、これは。

「ま、まだあと四日もあるんだからさ。しかも軟禁状態の地獄の合宿だぜ？ 何とかなるだろ」

四日しかない、じゃなくて、まだあと四日も。

「なる、かな？」

「なるよ。それでも解決できなかったら、そのときは^⑦ いわゆる吹奏楽の魅力^⑧ 力^⑨ かってやつを存分に発揮して互いにカバーし合えばいいんだから」

わたしは高い位置にある那津の顔を見上げた。しっかりした鼻梁に、整えられた眉。小学時代泣き虫だった那津とも中学時代うんとひねくれていた那津とも違う顔。

「そうか。そうだね」

「そうだよ」

「ずっとひとりで悩んでたから、なんか、口に出したらすすきりした」
互いにカバーし合う。スポーツではなく音楽でもそんなことが可能だなんて。やっぱり吹奏楽って面白い。

「ありがと。なっちゃん」

素直にお礼を言うのも照れ臭かったので、**擲揄**を込めて言った。

【山口なお美『グラツィオーソ』】

注1 おばさん：「わたし」の母親のこと。

注2 タンギング：管楽器で音の句切れをはつきりさせる演奏法。

注3 擲揄：からかうこと。

問い一 ――線A「確固たる」・B「空々しく」の本文中の意味として

適当なものを、次のア～エからそれぞれ選びなさい。

A 確固たる

B 空々しく

ア 前々から決めている

ア 真実味がなく

イ 容易に動かない

イ 自信がなく

ウ 漠然としている

ウ 親しみがなく

エ 言葉では表せない

エ 迷いがなく

問い二 ――線①「肩を揺るせくつと笑った」とありますが、なぜ那津は笑ったのですか。次のア～エから選びなさい。

ア ひとり言のつもりでつぶやいただけだったのに、「わたし」が話しかけられたと勘違いをして返事をしてきたから。

問い六

――線⑤「わたしは掌の缶から顔を上げられない」とありますが、それはなぜですか。その理由として当てはまるものを次のア～エから選びなさい。

ア 那津の返事の声から自分の考えを受け入れてもらえないと分かったり、この問題を解決する自信を無くしてしまったから。

イ 他のパートも難しい曲であるのに自分だけが努力しようと思わず、がんばっている那津に対して申し訳ないと思ったから。

ウ 自分の出した答えが自分の目指すところのものではないが、それしか方法を見つけないでできず悔しいから。

エ 自分自身の問いかけが間違っていると分かっており、そのことに対する那津の反応を見るのが不安だったから。

問い七

――線⑥「そんな音楽」とはどのようなものですか。本文中から二十字程度でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問い八 ――線⑦「いわゆる吹奏楽の魅力ってやつ」とはどのようなものですか。本文中から四十字以内でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問い九 本文中の「わたし」の那津に対する意識についての説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 自分が悩んでいることを察して、何とか普通に接しようとして努力してくれる那津に申し訳なく思った。

イ 同じパート内の音にも気を配っているという那津の言葉を聞いて、那津の演奏レベルの高さにおどろいた。

ウ 自分の意見をはつきり言いながらも、「わたし」を励ましてくれる那津の成長した頼もしさに初めて気づいた。

エ 雰囲気以前と変わってしまったことで那津との距離を感じ、今までのように素直に接することができなかった。

イ 「わたし」の様子を「クワイ」と言ったのに、「わたし」が自分のことと気づかず、建物のことだと勘違いしたから。

ウ 「わたし」が落ち込んでいると思つて心配して声をかけたが、冗談が言えるくらい元気だと分かり安心したから。

エ 簡単な質問にも答えられないほど悩んでいる「わたし」の様子を見て、少しでも元気つけようと思ったから。

問い三

――線②「カッターシャツに見える」とありますが、最初からここまでの表現の特徴の説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 那津が笑うことや服装の明るさから、那津がまだ「わたし」の悩みに気づいていないことを暗示している。

イ 室内の様子を詳しく描くことで、「わたし」が他の事に目を向け、目の前の問題から逃げていることを表している。

ウ 室内の広さや那津の明るい様子を描くことで、それとは対照的な「わたし」の悩んでいる様子を際立たせている。

エ 建物の白さと那津のシャツの色を重ねることで、「わたし」の悩みを那津が受け止めてくれることを表現している。

問い四

――線③「那津は演奏を聴いてる？」とありますが、「わたし」はどのようなことが気になって、那津にこのような質問をしたのですか。それを表す一文をこれより後の本文中から探し、最初の五字を答えなさい。

問い五

――線④「それってやっぱりまずいと思う？」とありますが、これに対して那津はどのように考えていますか。本文中の語句を用いて二十五字以内で答えなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

長い歴史の中で人類は数多くの発明をしてきた。その中でも最大の発明といえるのが言葉の発明である。言葉の発明は人類に強力なコミュニケーションの手段をもたらした。これによって人類は①他の生き物とは異なる独自の進化をとげることになった。

もちろん、コミュニケーション^Aの手段を持っている生き物は人類だけではない。たとえば、ほ乳類や鳥類の仲間には、鳴き声で情報を伝えるものもいるし、イルカやクジラは超音波^{ちょう}によっておたがい^aに「コウシン」と言われているが、こうしたコミュニケーションの手段では、情報を伝えられる距離^{きょり}や伝えられる情報量が、^b力^{ちから}がられる。

一方、人類は言葉というコミュニケーションの手段を用いることによって、より複雑な情報をより^cエンポウの相手に伝えることができるようになった。言葉を用いることで、細かな情報や、微妙な気持ち^{びみょう}、深い考えなどを、よりくわしく、より正確に表現することができる。さらに、言葉を文字にすることで、目の前にいない相手にもそれを伝えることができる。こうしたことは全て、言葉がなければ実現が困難なことであった。

また、言葉は紙などの②媒体^{たい}に記録されたり、保存されたりすることによって、何十年、何百年先の人もそれを目にすることができる。紫式部や宮沢賢治^{みやざわけんぢ}など、昔の人^Bの思ったことや感じたことを、現代の私たちが知ることができるのも、言葉があるおかげである。

これらの働きから、言葉は「X」を超えたコミュニケーションを可能にする便利なツールといえるだろう。

四 次の1～5について、ア～エの中で熟語の成り立ちが他と異なるものを、それぞれ一つずつ選びなさい。

- | | | | |
|---------|-------|-------|-------|
| 1 ア 豊富 | イ 増加 | ウ 往復 | エ 労働 |
| 2 ア 再会 | イ 登校 | ウ 創業 | エ 納税 |
| 3 ア 職員室 | イ 空模様 | ウ 自然界 | エ 海岸線 |
| 4 ア 大成功 | イ 新記録 | ウ 未確認 | エ 低学年 |
| 5 ア 衣食住 | イ 市町村 | ウ 天地人 | エ 句読点 |

問い一 線a～cのカタカナを漢字に直しなさい。
問い二 線A・Bの「の」と同じ働きをしているものを、それぞれ次のア～エから選びなさい。

ア この本はあなたの^aですか。 イ 月のきれいな夜だった。
ウ 友人の^bな悩みを聞く。 エ 彼は本を読むのが速い。

問い三 線①「他の生き物とは異なる独自の進化」とはどのようなことですか。それが書かれた一文の最初の四字をぬき出しなさい。

問い四 線②「媒体」と同じ意味を表す外来語を、次のア～エから選びなさい。

- ア メモリー イ レコード
ウ コピー エ メディア

問い五 線③「宮沢賢治」について、次のア～オから宮沢賢治の作品でないものを二つ選びなさい。

- ア よだかの星 イ 走れメロス ウ 春と修羅
エ 風の又三郎 オ トロロク

問い六 「X」に当てはまる言葉を次のカタカナの語から選び、漢字に直して答えなさい。

- | | |
|------|------|
| ソウゾウ | セダイ |
| ジクウ | カンカク |

五 次の1～5の各文を、例にならって敬語を用いた表現に改めなさい。
(□「マス」には、ひらがな一字が入ります。)

(例) お客さまが来た。

↓ お客さまがいらつした。

1 お茶とお菓子^{かし}を食べてください。

↓ お茶とお菓子を□□□□てください。

2 本日は来てくれてありがとうございます。

↓ 本日は来て□□□□てありがとうございます。

3 先生に会えてうれしいです。

↓ 先生に□□□□れてうれしいです。

4 お写真を見ました。

↓ お写真を□□□□しました。

5 このお話を知っていますか。

↓ このお話を□□□□ですか。

